



在宅福祉の取り組みについて

川内町社会福祉協議会
事務局長 仙波 照夫

その年の夏は澄み、雲一つない暑い日々が続く毎日でした。毎年夏を迎えるとその時のことを思い出します。昭和二十年七月二十七日戦災にて松山が焦土と化し城山の南も何処からでも市内が見渡せる状態でした。その日焼け尽きた市街の焼跡に数人の方が茫然と立っている前に青銅づくりの仏像を枕にして指を胸で組み乱れた様子もない真黒に焼けたお年寄りが横たわっていました。人の生涯は一日にして変容することを目の当りにしました。この方が何故仏教を枕にしたか知る術もありませんが、人により信ずる神は違ってもこの人は神に縋でも託して安らかに他界されたものと思うと色々な想いが頭をかすめ、生きる尊さと死の尊厳を強烈に感じたことを毎年思い出します。いま身体障害者や独居老人宅を訪問するヘルパーと在宅福祉とは何かを、訪問先にてお話しや出来事から学ぼうとしています。在宅福祉対応策は全く違った生き方をされてきたお年寄りに画一の在宅福祉対応策はなくひたすら各人の人生観を聴き、この人に今、何が必要で、何が生涯を幸せと思わせるかを常に模索しておりますが人生体験の豊富なシニアであるだけに、日々の言動にヘルパーは心洗われる思いをする事があるようです。そこで、今幸せであることが、生まれてきてよかったに通ずることから持たれる才能と特技を気分と体力に応じ生かせ、突如散る事のあった古い時代と違い人生により多くの潤いを味えるよう自らが活力を求めて行動し、世間心の遺産を残すことに生甲斐を覚える風土の醸成に共に努力したい。

訪問介護の実施について

看護婦 八木 幸子

二十一世紀には、四人に一人が六十五歳以上という超高齢化時代を目前にして、厚生省では「高齢者保健福祉推進十ヶ年戦略」というゴールドプランを打ち出し、その四本柱の一つに「在宅福祉対策の緊急整備」が行われています。

三恵ホームにおきましても、現在まで施設福祉に専念して参りましたが、地域福祉が強調される昨今、在宅福祉サービスに取り組み、施設の社会化を図って行きたいと思えます。まず、その手初めとしまして、十月頃を目標に、独居、虚弱、寝たきり老人の御家庭を訪問し、介護方法、介護用品の斡旋、健康面、栄養面等の御相談を寮母、看護婦、栄養士、各専門的な立場でお受けしたいと思えます。又、寝たきり老人等の要援護の人だけでなく、すべての老人の方を対象に地域の施設として気軽に御利用される事を願っています。

三恵ホームも川内町ですでに十三年余りを経過し、この間、地域との交流も計ってきましたが、多様化する地域のニーズに 대응するためにも一人一人が自己研鑽に励み、施設福祉と並行しながら在宅福祉サービスへと進んで参る所存でございますので、その節は宜しくお願い致します。

